

滿州佐伯村おぼえ書 (一)

ハ第十次佐伯開拓團小史

會員 矢野徳弥

國民学校の落成

前年の秋、着手した國民学校の校舎は、三月に入つて日氏出来上り、四月の新学期から使用されていたが、春耕が一段落したとこゝで、六月二十二日、省・県の關係者を迎え、盛大に落成式が行われ、奉仕隊員も全員これに参加した。

新築成つた校舎は、赤煉瓦の堅牢華麗な建物で、基幹水路を背に、東西に大きく横たわり、内部は六つに仕切られて東側に教員室、西側に倉庫ととり、中央四区画を教室に充て、うち二教室は、仕切りを除けば講堂に使われるようになっていた。

また、教員室の裏側には、教員住宅二戸が別棟で建てられていた。

とこゝでこの学校建物は、本部建物と並んで一朝有事の際、団員や、その家族を収容して、外敵に備へる含みを持つていたが、まさか二年後に、それが現実にならうとは、この日の出席者の大抵もが、思い及びなかつたに違いない。

一戦戦後、ここに女子を合志奉仕隊員、入植地と違おれた広陵開拓團(広島県)員等多数が収容され、幾多の

苦難の歴史を刻むことになる。

日誌には、

○六月二十二日 火曜 晴

在滿佐伯國民学校落成式。本部に点検表を返納して、そのまゝ学校に集合、式に参加。式後、演藝会、酒をし、小生詩吟、田中喜正農流行歌。団員の人達に御馳走になる。

六名(竹田道枝・甲斐文子・御手洗伸枝・深矢琴子・深矢道子)で記念写真。

なお、日誌に記載はないが、この時期、佐伯神社の建立が行われていた。

場所、校庭の東側に連なる広場で、社殿は、煉瓦で造られたニメートルばかりの台座の上、軒高一、五メートルの白木の神殿を載せた、至つて簡素なものであつたが、三十名以上の団員の連署により、在滿日本大使館の承認を受けて設立した、言わば正規の神籍を持つものであつた。祭神は天照皇大神を中心三柱であつたといわれるが、他の二神については、關係者の記憶が定かでない。祭事は、神職に連なる黒木一男が奉つていた。なお、神殿は、大工の心得のあつた所賀縁が、自分で図面を引き、自揚を材料に苦心を重ねて造り上げたものであつた。所賀はこの後すぐ志召したが、戦後無事に復員している。

平和な生活

その頃、日本内地の食糧事情は、ひどく悪化していた。砂糖は早くから配給制となり、街からパンもうどんも姿を消し、食糧生産果の大分でも、米は一人二合五勺(三

五五グラム)の配給、それも代用食として大豆ぬいもが加えられてのことであつた。しかし、佐伯村の開拓地では食糧に何の不自由もなく、平和な農村生活と楽しんでゐた。

この頃の作業の主体は、水田の除草であつたが、六月の中の一四日は終了した。国民学校落成式のおと、高野隊長は本部に通い、二十七日まで作業記録を整理を行なつた。

○六月二十八日 晴

久しぶりに水田に出る。最初に播種したものの十八センチ、最後のもの十七センチとなる。

○二十九日 晴

除草 三、四号地とも終る。中々暑くなつた。然し皆が頑張つたので、割合早くすゐそうだ。そむも時期になる。

○三十日 晴

応召家庭の水田除草奉仕にゆく。

○七月一日 木曜

本日公休

○二日 晴

応召家庭の水田除草奉仕

○三日 晴

午後の作業始めを三時半(二時間下げ)にする。森政校長宅に鉄砲を借りに行つたが、不在で残念。(鴨さ追うため)

○四日 日曜 晴

暑い晴天がわづき、若い隊員が休むたがる。かげでぶつぶつというかとりあつた。

○五日 晴

水田除草

○六日 晴

二号地の除草は、草が多く、持ちず。

○七日 晴後曇り

水が少なくなる。曇るも雨は来らず。支那革命記念日なれば、ゼンガイをつくる。

○八日 雨

久しぶりの雨で、朝から休む。

○九日 曇後晴

午前四時起床、終日月表の集計、果より慰問のヨーカーニ本づつ受領

○十日 晴

三号地に移るも、雑草に圧倒され、四枚は放棄する。羽柴 寿彦(中野村)アメリバ赤荊。

○十一日 雨後晴

午前中、県公署開拓股長山岸氏の講話。

午後除草、稲は一尺以上伸びる。葉の垢みたいなものか付いてゐる。蔓延が心配。

○十二日 月曜 晴

午前四時起床とする。水田除草。水は豊富となる。水路に架る橋が落ちる。

○十三日 晴

暑いが皆元気がいい。特に女子は病人もなく、作業に熱心だ。土崎金治、田中安正、羽柴寺の三番痲気。木口作雄 元気となる。

夕方水浴び水浴びのりき、宮下 七(直見村)君が、おまがとる。

○十四日 晴

今日日豊熱帯で休み。朝、宮脇正人君(上野村)が二尺位の鯉をとる。昼はせんざいと高梁酒(一升二合あり)。夕食は鯉料理、中々よい日だ。

○十五日 晴

朝の豚汁が過ぎたのか妙に悪い。最上の学校に、軍の査閲の予行に行く。(二次の友重夫(重岡村)長と一緒)。孝公(袋)を見たら補充兵手帳を忘れてきている。大失態だ。急いで自宅に電報を打つ。

○十六日 晴

大根、白菜の播けしきをする。午後団長が来て、一緒に水田を見廻る。鴨の被害が大きい。

○十七日 晴

頭痛がするので、河野高義(明治村)長と畑の除草をする。午後、国民学校で補充兵査閲の予行をする。夕刻土崎最腹痛を起し、六人で本部の病院に運ぶ。

○十八日 日曜 晴

頭痛が止まず、軽作業の西瓜畑の除草に専らある。午後及査閲の予行。おまゝ頭痛がひどいので団長宅に泊り、医師の診断を受ける。

○十九日 晴

査閲だが、わけない。昼前、やっこのことで隊の宿舎までたどり着く。

○二十日 晴

午後三時より国民学校で、副団長を囲む座談会あり。遅刻して団長に叱られる。申し訳ない。

団の方では、もう小麦がすつかい刈られ、そのあとにトーピーズ(大豆)が生育している。隊が入ってだいぶ後に播いたのは、満州の農作物の、生長の早さは驚きである。

○二十一日 晴

病人が十人くらいあり困る。これでは盆までには除草が終りそうもない。

○二十二日 晴

第四号地に行つたが、夜がなかなかならないうで、皆一生懸命働く。十二本位に分けつしたのがおる。

○二十三日 晴

朝夕はとも涼しくなった。稲の発育に影響せぬかと心配される位だ。入院者全部帰る。

○二十四日 晴

今朝の点呼日、林 栗最を除いて全員出る。久しぶりだ。嬉しい。朝の礼拝に太陽の昇るのが見られるようになった。日がかげだけ短くなったのだ。

○二十五日 日曜 晴

除草、稲を割つてみたら、一分位の穂ができていた。

○二十六日 晴

かぜ気味で頭痛がする。

○二十七日 曇り

炊火熱が出た。仕方はない、倒れるまでやるのだ。稲は水分をばらばらになっている。昼食は食べず休んでいたら、女子隊員が心配して、くず湯を作ってくれた。

○二十八日 晴

四時頃より雨となり、ひどくこごえる。頭が重いのので水田には行かず、菊池忠義君と畜舎当番をする。女子隊員の好意で、くず湯をとる。

○二十九日 晴

とても頭の調子がよいので水田に出る。稲の穂の出そうなのを見ると、じっと休んでおれない。

○三十日 晴

今日は、おんばらいた。内地の家に行たら、フクラカシが食えるになあ……と、一日中食物の話をする。故郷が恋しいらしい。

○三十一日 晴

除草 午前八時半、雨が降り出して作業休めとする。それより愛国百人一首のかるた取りなどして遊ぶ。早くゆらねば、盆まで除草が終らないが……。

日記は、このあと帰国までずっと書かれていたというが、惜しくも失われて、いまはない。しかし、この当時佐伯村建設応援のため、内地母村側から送られた多数の青年男女が、どのような生活や働きぶりを見せていたかを知るには、以上の記録だけで充分と思われる。

なお、十八年に派遣された奉任隊員の中には、この外にも筆まめな人が何名かおり、二次隊員の富高晃(上津村)も現地の稲作について、支那古観察記録を残しているといわれる。

高野日記から後のことについては、隊員の一人であった甲斐博志(中野村)が、次の如く語っている。

『隊長の心配していた水田の除草も、予定どおり終り、盆には、戦時体制下の内地では、とても許されそうもない盛大な盆踊り大会が、国民学校の校庭と埋めて挙行された。』

稲は天候にも恵まれたが、一次・二次両隊員の対抗意識も強く、いきおい競争の形をとったので、団員農家としての特別な出来であった。

盆が終ると、団長に連れられて、新京・ハルビン方面に見学旅行に出た。まるで修学旅行のように楽しかったが、帰国するとすぐ、土崎金治・林 要の両班長に召集令状がきて、あらためて戦局の厳しさを知った。九月にすると大分寒くなった。連日、稲刈りが続く。刈り取った稲は大きく束ねて圃場に積み、団に引き渡した。

正確な日を記憶していないが、九月の末に団を離れ

た。途中、昌岡県公署で、特別の精励により食糧増産の功があったとして、富高 晃・河野高義、それに自分(甲斐博志)の三名が褒賞を受けた。もらった金一封には、金五円が入っていた。

帰りに、旅順の戦跡を見学した。そして大連から乗船しようとしたが、すぐに黄海はアメリカ潜水艦の制するところとなり、危険を避けるため止むなく再び北上し、朝鮮經由で十月初頭に無事帰国した。なお、隊員の一人麻生正夫(四尾村)は、戦後を希望して開拓団に入団した。』

### 六 畜産指導員の招へい

佐伯開拓団は、入植の始めより、畜産指導員を欠いていた。

戦時下であり、獣医技術者の多くは戦地に送られ、残された数少ない人達も、軍馬の増産に奔走させられるなどの事情があり、容易に地元から人を得ることができなかったのである。

しかし、現地では、日本馬・蒙古馬などの役畜の外に、副業を兼ねて新畜に朝鮮牛を導入して仔牛の生産を始め、またバイクンヤール系の改良豚を多数入れて、その増殖を図る計画であったから、この面の技術指導が、とくに望まれていた。これに加え、ここは鼻疽、牛疫、豚コレラ、家畜へストなど、家畜伝染病の常在地で、その防除対策も緊急の要務であった。

このため、畜産指導員の招へいは、待望久しいものがあつたが、十八年に入って間もなく、開拓総局から林という指導員が送り込まれてきた。団長は最初から乗り気

でなかつたが、ある筋からの強い推せんによるものといわれていた。

着任した本人が、本部勤務の若い団員に語ったところでは、「俺は、元陸軍の騎兵將校であつたが、二、二六事件に關係して軍を追われ、滿州各地を渡り歩いてゐるうち、関東軍のある將校の世話で、こんど開拓團の指導員に採用してもらつた。」とかで、三十前後の年齢で、風貌を体格をしながら兵役のないところを見ると、あるいはそうした過去があつたのかも知れない。しかし、話の程度から見て、將校出身というのは疑わしく、多分、下士官であつたらうというのが、団員達的一致した見方であつた。

案の定、實際仕事に當らせて見ると、戰術技術はおろか、畜産一般の技術的素養も全く欠き、ただ、馬の扱いは慣れてゐるといふことだけで、指導員とは、到底及ばないとはいお粗末な人物であつた。それのみか、昭和維新の志士気取りで、大言壯語を重ね、毎日のごとく自評をおもつて、指導に出ることを避け、団員達の著しい不評を買つてゐた。

ところが、ここで一つの事件が發覚した。四月に入つて、朝鮮の釜山に、日本馬の購買に出張させた際、必要な頭数を揃へることなく、団の公金を遊興に費消してしまつたのである。

事實を知つた團長は、これを機會にと、上申の上、いきなり同指導員を追放してしまつた。五月の終りのできごとであつた。

それからしばらくして、こんどは飯野という、獸医資格を持つた指導員を推せんしてきたので、これを改め入れることにした。

飯野指導員は東京の出身で、小動物専門の獣医であつた。

だが、企業整備により転業と余儀なくされた商店主等と共に、東京興安開拓團（内藤近一の興安北省向城守逆部に入り、終戦時、全滅の悲運にあつた）に入り、その指導員としていたが、なん争かの事情があつて同団を離れ、佐伯開拓團に転任してきたのであつた。年齢は五十歳に近く、温厚で学究的なタイプの人であつたが、それだけに、大動物の扱いは、かぎりの苦勞を強いられる面があつた。このため、佐伯開拓團にも長く馴染めず、翌年の夏には、再び他の開拓團に去つたようである。

### 八 團長、全連會議へ

畜産指導員には恵まれなかつたが、開拓村の建設は極めて順調であつた。入植地に恵まれたせいもあつて、「主耕従建」の方針が一応の成功をおさめ、稲作を主体とする営農基盤が、早くから安定を見せたため、建設・営農に取組む団員の意欲の高さは他団の比でなく、その当然の帰結として、食糧の増産効果も著しいものがあつた。それに、温良、淳朴な佐伯人だけの編成といふこともあつて、団内の人間關係が、非常にしつくりと行つてゐた。

そして、北山武雄、大友菊次郎らに指導者とする基幹先遣隊員の同志的結合に支えられて、團長のリーダーシップが、強固に確立されてゐた。

このため、中央部の關係機關には、余程よく見えていたと思われ、いつしか佐伯開拓團が、十次以後の開拓団

の模範と取り沙汰されるようになり、その建設状況も、勤勞奉仕隊員の活動が、しばしば満州日報などの中央紙に書かれて、全滿に紹介された。この頃、マンガ家の坂本牙城（当時、満州日報にいた）が、幸に河田も取材に訪れていたことを記憶している団員も多い。

ところで、そうした実績を賞われたのか、团长矢野武吉は、推されて、全連会議の議員に選出されたのである。これを聞いた団員達は、「うちの团长が、満州の国会議員に選出された。」と喜んでくれたという。  
全連会議——正確には、満州国協和会全国連合会議という。

もともと、満州国には、日本の国会に相当する立法機關は設けられていない。多分、日本の支配上不都合であったにちがいない。そのため政党内閣も存在しなかった。そして、満州国だけ見られる、協和会という独特の組織が設けられていた。昭和十七年の朝日年鑑によると、「協和会は、大同元年三月の満州国の成立について、同年七月二十五日創立された独特の国民組織で、政府と表裏一体となり、建國の理想實現に当らんとする、國家的団体である。活動単位は分会で、地域別、職場別の二種あり、指導統括機關として、中央に中央本部、地方の行政単位へ省・県に地方本部がある。」とある。

この中央本部の意志決定は、政府の外から参与する手段として、全国連合会議が持たれていたもので、矢野团长は所属する四平省開拓部会を母体下、議員に出ているのである。なお、このとき全連会議には、開拓関係から三名の議員が出ていたという。（つづく）

記録

わがふるさと、元田誌、

— 河 川 —

会員 市野 瀬 仁

河 川

(一) 井 崎 川

「井崎川は、水源北海道郡津組村字八戸から、南海郡郡明治村を経て上野村に至り、幹線（番匠川）に合す。四里〇五丁、〇ニ」

と大分県会史（明治四二六、三五）に出ている。誤は、「滄海変じて桑田となる」というが、小さな井崎川の変遷には、そんな大それたものがあるはずがない。川の変遷については、小田井堰のように特別のことがないが、古い時代の資料は皆無と行ってよからう。

ただ古老から、元田前の山、下に川が流れていたとか、古川は名前のように昔は川であったとか、植松の明治小学校の付近は広い川であったとか、など聞くことがあり、それらと関連した伝説もある。なるほど、これらの箇所は、昔、川があったとは思えないような地形である。

しかし、元田前の話とは別として、他の二か所は、百年や二百年の時間では考えられない急であるから、ここには深入りしない。川の深さは、いくら小さな井崎川でも、千年や万年単位の尺度から見ると、かなりの変化がある。